

終結していたら、我が軍の損害もかなり少なかったのではないだろうか。復員船上の十日間は、なんとも言えない気持ちだった。戦争は「いやだ」と。

十二月十六日、名古屋上陸、復員手続等にて二、三日。十二月二十日故郷に帰る。

平和の尊さは、悲惨な体験をした者でないと理解できないだろう。私は今、平和の有り難さをつくづく実感しながら老後の一日一日を送っています。

## 比島戦末期 主計兵の思い出

新潟県 家塚 克 己

昭和十九年四月十日、関東軍化学練習隊に分遣を命ぜられ同日満州の牡丹江を出発。哈爾濱・齊齊哈爾を経て四月十二日龍江省富拉爾基に到着、同隊に入隊した。これが私の軍隊生活六年間の運命を大きく左右する原点となった。

同年五月十四日教育終了、原隊復帰を命ぜられ牡丹

江第三六三七部隊に入った。部隊に入ってみると、部隊は南方転出のため騒然としていた。私は同日、大隊本部付けで兵器係を命ぜられた。本部に行ってみると小林軍曹と言う兵器係がいた。副官に聞いて見ると、私の兵器は化学兵器のことで、一般の科学兵器ではなかった。

南方出陣の準備も整い六月十二日牡丹江出発。釜山門司を経て台湾に寄港、七月九日台湾を出港、どこに行くのやら船団は南方に向かった。私の乗った船は「瑞穂丸」、数十隻の海軍護衛艦に守られ、夕闇迫る基隆港を後にした。明けて七月十三日午前七時三十五分「日蘭丸」に魚雷命中、船団の犠牲になった。私たちは甲板に並んで「日蘭丸」に拳手の敬礼をなし、犠牲者の冥福を祈った。魚雷命中から船体が波間に見えなくなるまで実に三十一分、この間、退避可能時間は七、八分しかなかったという。魔のバシー海峡も無事に通り、七月十六日ルソン島マニラ上陸、ダガホイ小学校に入る。

八月十六日、大隊本部をマニラ城内のレトラ大学に

移動、同日私は經理室勤務を命ぜられた。これを不服として副官に「本科の下士官がなんで經理室に行かねばならないんですか」と問うたところ、「至上命令だ、文句を言うな」と叱られた。それから終戦まで經理室で終わった。

九月二十一日当日、私は主計の命を受け、午前八時兵站司令部に糧秣受領のため本部を出発、運転手大島一等兵、助手貝瀬上等兵と私三人で兵站に向かった。

兵站司令部に八時十五分ごろ到着。係の者に部隊の伝票を出し糧秣受領中、俄かに兵站の中が騒がしくなってきた。私は何が何だか分からない。と上空からバリバリと機関銃の音がした。空襲だ。空を見上げると、上空はゴマを撒いたように敵機の大編隊だ。私は早速糧秣の受領を中止して貝瀬、大島を呼んで部隊に走った。今来た道路には人っこ一人いない。そのころには港湾、飛行場、司令部、各所から黒煙が上っていた。

やがて、ニコラス飛行場西側に差し掛かった。飛行場は火柱と黒煙でもうもうとしていた。敵の爆弾は私の車と平行に落下、爆風が頬を叩く。私は車窓を閉め

て全速で走った。後三〇〇メートルくらいで飛行場を越える付近で、だれか大きな力で私の尻を空中に投げ上るような気がしたと思ったらそのまま意識を失った。それから何時間くらい経ったか、ふと気がついた。そのころから、そろそろ記憶を取り戻し始めた。そうだ爆撃されたんだ、俺は負傷したんだ、と分かっていたが、まだ両腕が動かないことや両耳が全然聞こえないことには気が付かない。暗かったのは波状鉄板が飛んできて私の上を覆っていたからだだった。

意識がふと戻ると、貝瀬はどうしたろう、大島は、と見ると貝瀬は頭をがっぱり割られ腕がもげそうだと見ると足で揺さぶって貝瀬を起こした。貝瀬はまだ気を失っている。ようやく貝瀬も気が付き、大島はどうしたろうと見ると、道路の向こう側で口から泡を吹いてうなっている。見ると、足、体に重傷を負い歩けない。私は大島に「必ず後で迎えに来るからここを動くな」と言って、私と貝瀬と二人で部隊に向かって歩き出した。頭から流れ落ちる血は目を塞ぎ首筋アゴと伝わり落ちる、何度も頭を振ったりしていたが、目が見えな

くなった。どこで、どこの自動車か分からぬが車が寄って来て私たち二人を車の荷台に投げ上げてくれたが、私はそのまま意識を失った。

それからどれくらい経ったか、ふと気が付くとベッドの上にいた。もうすっかり日が暮れて真っ暗な中、白い着物を着た人が忙しそうに飛び回っている。気が付くと直ぐ飯が出た。腹が空いているので食べようと思いが食べられない。初めて両手が利かないことに気が付いた。

翌日、私は手術を受けた。それから二十日はかり経ったら両腕の上下運動ができるようになった。耳も左の方が聞こえるようになったが、右は全然聞こえない。

そのころから私は第五病棟の室長になった。総員患者一五二名だったと思う。かくして十一月五日、私もすっかり元気になって軍医に退院したい旨申し出た。軍医は「まだ左手の傷が治っていないので駄目だ」と言われたが、私がたっぺのお願いをしたら「それほど帰りたいなら帰ってもよいが週に一回退院」を条件に自己退院して、また経理室に戻った。

昭和十九年十二月二十五日、転進命令下る。翌二十一年一月十二日、エチアゲ飛行場に向かって行動開始、ソラナにおいて三月三日部隊解散。独立混成第二十六連隊に編入、第三大隊（下見部隊）本部に加藤主計と共に配属となった。三月十五日ソラナ出発、三月十九日任地ダビックに到着した。私はその日からジョネース・ダビック間約二十五キロの間の物資の輸送の任務に就いた。

ジョネースまでは車が通れたが、それから先は細い一本道、人間も装具を着けて通れない山道もある。そのため兵器、弾薬、糧秣などはジョネースに置いて任地に行った。私はシビリアン（土民）を使って筏を作り、筏に積んでカガヤン川を渡り、川岸で待っていたバトケ（ソリ）に積み替え、水牛に挽かせてダビックに運ぶ。これが私の仕事であった。

日中は敵機に発見される恐れがあるので輸送は夜間のみで、午後二時ダビックを出発、八時ころジョネースに着いて輸送準備、十時ころジョネース出発、朝方ダビックに到着、朝食午後一時まで昼寝。これが毎日

の繰り返しであった。

カガヤン溪谷は治安が悪い。一時はパトケ三十台も動員したことがあったが、そんなときは、土民の暴動やゲリラの襲撃に備え、護衛兵十数名付けてもらったこともあった。普段は、私と和田上等兵の二人でシビリアンと同じ服装で背に籠を背負い、むぎわら帽をかぶり、素足で歩くが、籠は二重底で下にはいつも二個の手榴弾が入っていた。一番苦しかったのは素足で川原の焼け石の上を歩くことだった。

昭和二十年五月十六日、部隊はバガバックに転進命令が下り、五月十七日ダビックを出発した。そのとき、加藤主計が私を呼んで「お前は傷兵だからここに残れ、そして留守中ゲリラ土民の襲撃に備えよ」と兵八名、銃八挺、米三〇キロ、病人が十五、六名だった。たった八名の兵でゲリラが襲撃してきたら、どうして防ごうかと心細かった。

六月二十五日、オリオン峠の戦いに敗れた友軍が続々とカガヤン溪谷に入って来た。私の部隊も多数の犠牲者を出して帰って来た。ダビックに来てから三カ月、

この間マラリアで兵力は半減し、その上オリオン峠の戦いで我が部隊の兵力は三分の一となった。

部隊はダビックの陣地を捨てて、さらに奥地に入り終戦を迎え、九月十八日ジョネースにおいて武装解除を受けた。

あれから早くも五十年、私も七十五歳になりました。両足不自由となり、思うように仕事ができず、今では家業も家計も伴に任せ、私は運動のため庭の手入れと養鯉と栗林二反歩ばかり栽培して気ままにやっています。

### 独立電波（堀江）小隊も照空隊も 歩兵として戦う

山形県 東海林 寿雄

私は昭和十八年一月十五日、「防空兵」として大阪集合地に入営し、下関、釜山、朝鮮半島経由、一月二十六日牡丹江馬鞍山にて満州第三六三七部隊（独立野